

10. まことに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。
11. わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
12. あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。
13. もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。
14. わたしはあなたがたに見つけられる。——主の御告げ。——わたしは、あなたがたの捕われ人を帰らせ、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。——主の御告げ。——わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。」

説教

今年が日本が敗戦して 70 年目に当たります。戦時下、日本の教会は、偶像崇拜をして神の前に罪を犯し、韓国をはじめアジアに於ける侵略戦争に協力して、隣人に対して罪を犯しました。その結果、神の怒りを受けて、不毛な「荒野の四十年」を過ごし、さらには苦しい「バビロン捕囚の七十年」を過ごしてきたと思います。それで、今日は、「バビロン捕囚」とは何だったのか、基本的なことを整理し、そこから日本の教会の戦時下と戦後を振り返って、これからのあり方を共に聖書から学びたいと思います。

まず、「バビロン捕囚」とは何だったのでしょうか。

ダビデ王朝期に絶頂期を迎えたイスラエルでしたが、偶像崇拜をはじめとする様々な罪を犯します。それで、神は北王国イスラエルと南王国ユダとに分裂させます。預言者や善王を通して罪を犯す王国を改革しますが、それも最後は限界を迎えることとなり、結局、北王国イスラエルはアッシリアによって滅ぼされ、南王国ユダはバビロンによって滅ぼされます。北王国が滅び、最後に残った南王国、それもエルサレムが崩壊した瞬間に、イスラエルは亡国の民となってしまいました。エルサレムはバビロンに二年間包囲された後に征服されます。その際、三分の一は剣に倒れ、三分の一は飢え死にし、残り三分の一は生き残りますが、社会的に身分の高い者はバビロンへの捕囚となり、残りの者は瓦礫の山と化したパレスチナで貧しく生活することとなります。

このように、「バビロン捕囚」とは神のさばきでした。自分たちの国が滅びて完全にこの世から消滅するのですから、どれほど厳しいさばきでしょうか。イスラエルの民は、神殿とエルサレムとを誇りとしていました。神殿は神を宿す場所、エルサレムは神がその真ん中に住む都です。そして、自分たちの神は天地の造り主にして支配者です。エジプトの神々も撃破しました。世界中のどの神々もかなわず、最強です。その神の宮、神の都が破られるはずがない、イスラエルの民は固くそう信じていたのですが、神殿もエルサレムも破壊されてしまいます。彼らの信頼し誇りとしていたものが、ことごとく奪い去られてしまいます。それは本当に厳しい神のさばきでした。とは言え、餓死や戦死に比べるとまだましです。生きているからです。たとえ自分の国が滅びても、自分はまだ死ぬことなく生きている。そして、生きている者には望みがあります。たとえ「捕囚」であっても希望があるのです。

エレミヤは、エルサレムがバビロンによって滅ぼされ、捕囚の期間が「七十年」であると預言します。「この国は全部、廢墟となって荒れ果て、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。」(エレミヤ 25:11)。エレミヤの預

言は成就し、エルサレムはバビロンにより滅ぼされます。そして、「七十年」間、捕囚となりました。

しかし、当時ハナヌヤのような偽預言者も現れて活発に活動します。ハネヌヤは、バビロンの侵略が二年で終わりユダは解放されると神は言っている、と偽りの預言をします(28:2-4,10-11)。それを信じて安易な希望を抱く者たちも少なからずおりました。それで、エレミヤは、偽預言により民を惑わして「主への反逆をそそのかした」罪悪で「今年、あなたは死ぬ」とハナヌヤに宣告し、果たしてその通りに、神に打たれて偽預言者「ハナヌヤはその年の第七の月に死んだ」のでした(15-17)。

29章では、偽預言者たちのことばに惑わされて安易な希望を抱かぬよう、既にバビロンに捕らえ移されている人々に向けて、エレミヤは手紙を送ります(29:1-3)。それは、捕囚がすぐに終わることはないので、腹を据えてバビロンで生活し、「あなたがたを引いて行ったその町の繁栄を求め、そのために主に祈れ。そこの繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから。」という驚くべき内容でした(4-9)。そして、次のように書き送ります。「まことに、主はこう仰せられる。『バビロンに七十年の満ちる頃、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。』」(10-11)

これによると、まず、バビロン捕囚が「七十年」続くことが明らかにされます。偽預言者たちの言うように「二年」ではなく「七十年」です。「七十」は完全数「七」の「十」倍です。「七」だけでも完全なのに、その「十」倍ですから、完全の完全ということで、例えば神の怒りとか、何か一つのことが全うされる期間を意味すると考えられます。「私たちの齢は七十年、健やかであっても八十年」(詩篇 90:10)とされていますので、一人の人間の人生の長さとも理解できます。神に呪われて、文字通り一生が終わってしまうのです。十戒では「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし」と言われました(出エジプト 20:5)。「三代、四代にまで」と言えば、罪を犯した本人とその子ども、孫、ひ孫までですから、およそ「七十年」となるでしょうか。この「七十年」という期間は、偽預言者の言うように「二年」ではないのでとても長いものです。一人の人間の全生涯の長さであり、同時に、自分だけでなく、子ども、孫、ひ孫にまで影響が及ぶのですから、深刻です。とは言え、確かに「七十年」は長いけれども、それでも「終わりなく永遠に」ではありません。「三代、四代」は長いけれども「子々孫々千代」ではありません。「七十年」に限定されています。神は、わざわい「七十年」に限定した上で、ご自分の民に惨めな「捕囚」生活を強いるのです。それは、永久に彼らを呪うためではありません。「捕囚」の七十年を通して、今一度彼らを、いわば再教育なさるためです。エレミヤを通して語られた神のことばの通りに、「それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのもの」なのです。「わざわい」という言葉は「悪、邪悪、災い」を意味します。「将来」という言葉には「終わり、結末、果て、未来、残りの民(remnant)」という意味があります。神は悪意で災いをもたらすために七十年間も捕囚生活を味わわせるのではなく、最終的には「平和(シャーム)」を与えようとしておられたのです。だから、「七十年」の苦しい苦しい捕囚生活には希望があります。「七十年」間、来る日も来る日も、神はイスラエルの民の前に立ちほだかって、バビロンの前に服従させて、祝福を差し止めておられましたが、それはすべて神の善意あるご計画によるものであって、最終的には永遠の「平和」をもたらすための「希望」ある捕囚生活だったのです。

捕囚前のイスラエルには平安がありませんでした。彼らが神に背いていたからです。確かに神殿はありましたが、自分たちには神殿があるという事実に住居して、その中では太陽崇拝や偶像崇拝が行われておりました(エジキル 8:5-18)。神を礼拝する最も聖なる場所で、最も神の忌み嫌う偶像崇拝が行われていたのです。だからこそ、神は

これを破壊しました。「こんなものならいらぬ」とばかりに、バビロン軍によって容赦なくエルサレムもろともぶち壊したのです。神殿を失ったイスラエルの民は、聖書を学び、聖書中心の礼拝をするようになります。これが会堂礼拝となります。

こうして、神殿が消滅する中で、神の民イスラエルは、あらためて聖書から学び、聖書に啓示された神のことばを中心に生活するようになります。そこで、偶像崇拜の罪と神の怒り、さばきも学ぶこととなります。今一度、神の律法、すなわち神のみこころを学び直します。そして、それにより、律法に背いて神に忌み嫌われ呪われる生活ではなく、神に喜ばれて祝福される「平和」な生活をするよう、新たに再教育し直されるのでした。

イスラエルに「荒野の四十年」を過ごさせる理由を神はこう説明しました。「こうしてわたしへの反抗が何かを思い知ろう。」（民数記 14:34）「四十年」かけ、じっくり、嫌と言うほど「思い知らされる」と言うのです。

律法にはバビロン捕囚が予告されています。偶像崇拜で「御怒りを買う」ことで「主はあなたがたを国々の民の中に散らされる」ものの、「しかし、ごくわずかな者たちが、主の追いやる国々の中に残され」ます。そして、その異教社会で偶像崇拜三昧の生活を思う存分味わうものの、しかし、最終的には「あなたがたは、あなたの神、主を慕い求め、主に会う。あなたが、心を尽くし、精神を尽くして切に求めるようになる。」と言うのです（申命記 4:25-30）。ここにバビロン捕囚七十年の意味が明らかにされています。神のさばきを受けて、どん底の生活を徹底して経験することで、神のことばこそが真実であることを思い知り、心からそれを行いたいと願うようになると言うのです。頭で理解することと心からそうなりたいと願うこととはまるで別です。頭で理解することは一日でできるかも知れません。でも、それを実践すること、それもそうなりたいと心から願って行うことは、一生かけて身に付いていくことです。そして、それを可能にしてくれるのが、呪われたバビロン捕囚の七十年です。神に日々呪われながら、どうしてこうなってしまったのか、どうしたらここから抜け出せるかを、真剣に考えます。考えて、学びます。神のことばを学びます。そして、自分たちのダメな歴史を振り返って反省します。それまでのあり方を改革するのです。こうして、もう二度と同じ過ちを犯さない、というより、同じ過ちを犯したくない、同じ不毛の苦しい捕囚生活を歩みたくない、そう心から願います。

日本の教会は大きな失敗を犯して「荒野の四十年」「バビロン捕囚の七十年」を過ごしてきましたが、それでも、日本の教会に宝があるとすれば、それは失敗の歴史だと思えます。まさに負の遺産です。これは我々の罪ですが、同時に神の恵みでもあります。自虐史観だといって葬らずに、負の遺産を大切に、「三代、四代の呪い」を乗り越えて、「千代に至る祝福」の土台を築いていきましょう。